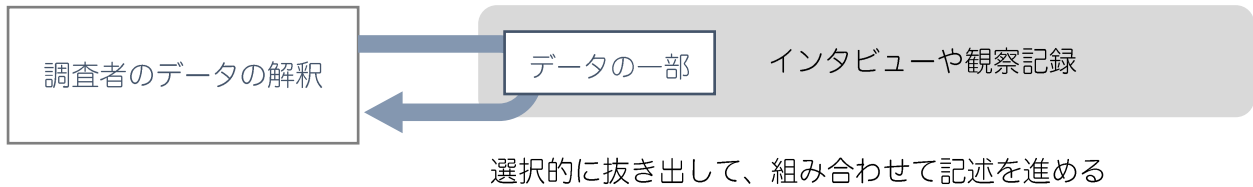


第28章 質的研究の評価基準 p465-486



- ・ こうしたやり方だけで記述を進めていく場合、研究の信憑性 credibility は十分なものとはいえない (Buhler-Niederberger 1985:475)

【選択による説得力】

研究者が自分にとって都合のよいデータだけ選んで、解釈を一見もっともらしく、説得力があるようにするやり方のこと

- 第三者は解釈と結論が導かれる過程を追理解することができない
- 研究者が典型的なものや無関係だと思ったり、それと矛盾していると思うケースやデータの扱いが不透明なままになる

➤ 質的研究の評価基準に関する方向性

- ① 妥当性や信頼性といった量的研究でも使われてきたような古典的な基準の応用／質的研究に合うように書き換える
- ② 質的研究の特質により適うように「方法に適した評価基準」を新たに作り出す
- ③ 表象と正当性 legitimation の危機 (Denzin and Lincoln 2000b:17) を受け、学問的知の有効性を論じることの意味を問い直す：そもそも論→本稿では議論しない。

■ **信頼性** ①と関連

・ 「ドン・キホーテ的な quixotic」信頼性

ある方法によってまったく同じデータがいつでも得られるかどうかを評価する基準

- FW の現場で、ある出来事についてステレオタイプ的に繰り返される発言や観察が得られたときには、それは「ほんとうに」そうであったことを示しているよりかは、その出来事の意図的に作り上げた解釈と考えるべき

・ 「通時的な diachronic」信頼性

ある現象の測定結果や観察が時間の経過の中で安定していること（前提として、研究される現象は何等かの変化をしてはならないものである必要がある）

- 質的研究の対象が該当することはめったにない

・ 「共時的な synchronic」信頼性

同じ時点で異なる他データ収集のツールを用いた場合、測定や観察の結果が恒常的／一貫していること。

- 質的研究では、この基準が満たされなかったときこそ意義がある：異なった方法・多様な視点から探求・追究していくことになる

■ 質的研究の評価基準としての信頼性

・ 研究対象の背景にある特定の理論や研究方法の使用との関連においては重要

- データ記録の標準化（参考：Spradley[1979]のフィールドノーツの4つの形式など（p468）
- インタビューや観察：トレーニング
- 得られた解釈を同じテキストの別の箇所や異なったテキストで検証

- データの成立過程を明らかにしておくこと（研究者の解釈／被調査者の発言）
- フィールド調査、インタビュー、データ解釈などの方法をトレーニングや点検作業の中で明らかにしておく（複数のインタビュアーや観察者がとる手順の比較可能性を高める）
- 研究プロセス全体にわたっての反省とその記録

➤ データやさまざまな研究の手順の**確実性 dependability=当てにできるかどうか**の検証につながる

■ 妥当性 ①と関連

・ 研究者がみようとしているものを実際にみているかどうか（Kirk and Miller）

- 当てはまらないところに関連や原則などを見出す（誤りのタイプ1）
- 実際には当てはまるどころに関連や原則などが無いという（誤りのタイプ2）
- 誤った問いを立てる（誤りのタイプ3）

・ 前提として：「現実とは社会的に構成されたもの」

➤ ハマーズリー（Hammersley 1992:50-2）「繊細な实在論 subtle realism」

1. 知見の妥当性は確かさ certainty の点では評価できない。
  - 知見とは仮定。説得力 plausibility や信憑性 credibility があるかどうかで評価される
2. 現象は、それに関するわれわれの仮定から独立しても存在している
  - 現象に関するわれわれの仮定は、その現象のおおよその近似値でしかない
3. 現象へのさまざまな視点を通して、現実には接近可能
  - 研究が目指すのは、現実の正確な再現ではなく、現実の表現／提示

- <研究者の側の構築>は<研究対象の側の構築>にどこまで根拠があるのか(Schutz 1962)
- 根拠は、第三者にとってどれほどの透明性があるか
  - データがどのように成立したかの検証をひとつの手がかりに妥当性は確かめられる
  - 現象がいかに記述されたか、いかに結論が導かれたかの検証で妥当性は高められる

・ インタビューの妥当性評価のためのアプローチ

- インタビュイーが、彼らのもの見方と一致していないような証言を、インタビュー状況の影響によって、意識的あるいは無意識的にしてしまうことがなかったか

- ・ コミュニケーションによる妥当化 communicative validation
  - インタビューとその文字化が終了した後に、再び調査対象者と会い、その意見を聞く
    - 正当に評価するためにどんなふうに聞く？
    - データと研究結果の基礎付けについて被調査者の同意が得られない場合は？
- ・ 妥当性概念の書き換え
  - 妥当化 validation のプロセスを重視→「知の社会的構築」(Mishler 1900:417)
  - 「妥当化」≡「社会的言説 social discourse」：得られた観察、解釈あるいは一般化の信用性 trustworthiness が評価対象
    - 信頼性 reliability、反証可能性 falsifiability、客観性 objectivity といった既成概念を無用に
  - ポスト構造主義のさまざまな理論を用いた妥当化に関する議論 (Lather 1993) \_\_本文 p473
    - 学問的知の正当性や妥当化の問題を否定するのではなく、妥当性に関する新しい理解を導き出す
- ・ 手順による妥当性
  - エスノグラフィー的研究を実施していく中で、妥当性を確実にする 9 つのポイントとして、Wolcott の指摘 (1990a:127-8)
    - ① フィールドで研究者はできるだけ聞き役に徹するべき
    - ② できるだけ正確なフィールドノーツを作成するべき
    - ③ 早い時期に書くことを始めるべき
    - ④ フィールドノーツや報告を読者も読めるような形で記録するべき (読者がフィールドノーツから自分の結論を出せる／研究者が結論を出した過程をなぞることができる)
    - ⑤ フィールド報告はできるだけ完全で、かつ
    - ⑥ 率直であるべき
    - ⑦ 研究者はフィールドにおいて、また自分の同僚から、自分の研究結果や提示へのフィードバックを求めるべき
    - ⑧ 研究結果の提示は、さまざまな側面のバランスをとりながら、
    - ⑨ 正確になされるべき
    - フィールドで注意深く振る舞うこと／妥当性の問題＝研究に関する執筆の問題
  - 「再帰的な説明としての妥当性」(Altheide and Johnson 1998:291-2)
    - 研究者、研究対象、研究プロセスは互いに関連付けられ、妥当性は研究の流れの中でさまざまな観点から確定される
      - ① 題材に関して：観察されるもの（行動、儀礼、意味）と観察の行為が埋め込まれたマクロな文化的、歴史的、制度的な文脈との関係
      - ② 観察者に関して：観察者と被観察者、ならびに観察のセッティングとの関係
      - ③ 解釈に関して：エスノグラフィー的データを解釈するために、観察者／被観察者のどちらの視点もちいられるのかの問題
      - ④ 読者に関して：研究の最終産物における読者の役割
      - ⑤ 文体に関して：記述や解釈をおこなうときに著者が用いる文体の問題
- 妥当性 validity の概念を捉えなおし、よりプロセスを重視する妥当化 validation の概念へと移行していく傾向
- 研究の個別部分ばかりみるのではなく、より視野を広げて研究プロセス全体の透明性を増そうとする傾向

## ■ 客観性 ①と関連

- ・ 質的研究の評価の場面ではほとんど取り上げない：例外として（Maddill, Jordan and Shirley 2000）の研究
  - 研究とその結果の適切な評価のために、研究者が自分の認識論的立場を明らかにする必要性：質的研究の基準に関する議論

**「現実の理解の仕方」が量的研究と質的研究であまりに異なっている  
量的研究の分野で通用している評価基準を、質的研究に応用する意味は???**

## ■ 代替の基準

- ・ Lincoln and Guba (1985):  
信用性 trustworthiness、信憑性 credibility、確実性 dependability、転用可能性 transferability、確認可能性 confirmability
  - 信憑性を高めるために：
    - フィールドへの「長期にわたる参与」や「根気強い観察」
    - さまざまな方法、研究者、データの種類のトライアンギュレーション
    - 研究に直接かかわっていない人との定期的なミーティング→盲点の洗い出しや作業仮説・その都度の結果の検証（ピア・デイブリーフィング）
    - 仮説に当てはまらないケースの分析（分析的帰納）
    - 解釈やその評価のために適した基準点の設定
    - インフォーマントを交えたデータと解釈の妥当性検証（メンバー・チェック／コミュニケーションによる妥当化）
- ・ 確実性のチェック＝監査 auditing のプロセス
  - 「監査の道筋 auditing trail」が踏まえるべき領域
    - ・ 原データ、その収集と記録
    - ・ データの削減および要約、理論記録、メモ、事例の簡潔な描写等による合成 syntheses の結果
    - ・ データの再構成、展開され使用されたカテゴリー（テーマ、定義、関連）と知見（解釈と結論）、および（概念を統合し、文献と関連付けられて）作成されたレポート
    - ・ プロセス記録（＝方法に関する記録）、および知見の信用性と信憑性を得るために下した決断
    - ・ 研究のコンセプト、個人的記録、研究参加者の期待のごとく研究を左右する意図や傾向に関する記録
    - ・ 試験段階まで含めた研究手段の開発に関する情報
- ・ 研究の手順と流れを明らかにすることによる評価
  - Huberman and Miles による点検のプロセス
    - ・ 研究結果はデータに基づいてだされているか？（サンプリングの適切性／データの正しい検討）
    - ・ 結論は論理的に導かれているか？（分析の戦略の正しい適用、違った説明が成り立つ可能性の考慮）
    - ・ カテゴリーの構造は適切か？
    - ・ 研究上の決定や方法の変更は政党なものか？（サンプリングの決定と作業仮説の関連）
    - ・ 研究者のバイアスはどの程度のものか？（終了は早すぎることはないか？フィールドノーツの中で見見当のデータはどのこっていないか？仮説にあてはまらないケースの探索はおこたっていないか？調査対象への感情移入が研究を歪めていないか？）
    - ・ 信憑性を高めるためにどのような方策がとられたか（誰かに草稿に目を通してもらったか？インフォーマ

ントのフィードバックは得たか？同僚のチェックは受けたか？フィールドで適當の長さの時間を過ごしたか？)

## ■ 理論形成の評価基準

- ・ Corbin and Strauss(1990:16)@グラウンデッド・セオリー法
  - 実証的データに基づく理論と、それを産出した方法を評価するための4つの手がかりや研究プロセス自体を評価するための7点\_\_本文 p479
    - 研究結果が実際の現象やデータに根拠をもっているかどうか
    - 実証的データに基づいた理論形成がなされているかどうか？
      - :彼らが作った方法論に沿っていたかどうか、になりがち。
  - 「分析の結果得られた理論は、有意義と思われるか？」=現実との関連性 relevance の側面の重要性
- 理論産出にいたる手順、得られた理論の発展の程度、理論の他のフィールドへの転用可能性、調査された文脈への反省が、調査全般を評価する中心的な基準となる。

## ■ 古い基準か新しい基準か:古い問題への新しい解答?

- ・ 質的研究を実証的に根拠あるものとするために
  - 各事例がいかに適切に再構成されたか:調査地や研究プロセスにおける社会的現実の構成を問うこと
  - 研究結果を出し、記述していく中で、いったい誰の構築が見出され、残っていったのか(研究者のものか、調査フィールドで出会った人のものか)
    - ・ 研究者が得た知見がどの程度まで被調査者の構築(フィールドの構築)に根拠を持つのか?
    - ・ これらの構築の翻訳と記録がどう実証的データ(テキスト)へとまとめられたのか?
    - ・ 研究者はどのように事例研究から、理論の発展や一般的パターンの発見に進んだのか?
- ・ Miles and Huberman (1994:278)による新しい基準と古い基準の等置・結合
  - 客観性/確認可能性
  - 信頼性/確実性 dependability/監査可能性 auditability
  - 内的妥当性/信憑性 credibility/真正性 authenticity
  - 外的妥当性/転用可能性 transferability/適合性 fittingness
  - 活用 utilization/応用・行為志向

## ■ 質的研究にとっての課題としての品質評価

- ・ 研究者本人、質的研究の消費者、研究を審査する立場の者にとって、依然、質的研究の評価基準は必要とされている
  - さまざまなガイドライン(カタログ)が発表されている

- ガイドラインが一般的な表現になっていても、多様な形式の質的研究の間で合意がみられるものではない

## ■ 品質基準か品質保証の戦略か

- ・ 質的研究の質への問いに内部で応えられていないにしても、外部から向けられる研究の質への問いに応えなければならない。
  - 基準にいかなる形の質的研究も適用すべき？／個々のアプローチに特異的な基準が必要？
  - よい研究と悪い研究とを区別するための指標を含んだ基準の作成は可能？
  - どれだけの真正性が必要で、不十分な真正性とは？
- ：質的研究の「本当」の質を、基準の中で把握するのは非常に難しい
- 「質的研究のジレンマ」(Yardley 2000)

## 第29章 質的研究の質——基準を超えて p487-502

いかに質的研究の質を高め、確かなものにするか：いつ／どんな／研究プロセスの中での管理

### ■ 質的研究の適応

- ・ ある治療が特定の症例の特定の問題に適しているかどうか「適応する」かが問われるように、質的研究も「適応」が問われる必要がある。
  - 参考：表 29.2 (p489)、表 12.1 (pp172-173)、表 16.1 (pp260-261)、表 21.1 (pp348-349)、表 27.1 (pp456-457)、表 33.1 (p557) など
- ・ 質的研究は、方法論的な見通しや原則および反省にもとづいて計画されるべき
- ・ 相応の知識に基づいて、質的研究における理論と方法の決定を下し、振り返る必要
  - 参考：表 29.3 (p492-493)

▼▼▼評価基準の適用を超えて、質的研究の質を高める戦略▼▼▼

### ■ トライアンギュレーション

- ・ ひとつの現象に対してさまざまな方法、研究者、調査対照群、空間的・時間的セッティングあるいは異なった理論的立場を組み合わせること
- ・ Denzin (1989b) によるトライアンギュレーションの4パターン
  - ① ある方法を追加して使う（二つの質的方法を組み合わせる、質的方法に一つの量的アプローチを加える）
  - ② 異なった種類のデータを取り入れる
  - ③ 異なった理論的視角を採用する（ある研究対象に質的研究の複数の研究視角からアプローチ）

- ④ 異なった理論的・方法論的背景に立つ複数の研究者が、共同してひとつの研究プロジェクトにかかわる

## ■ 分析的帰納

- ・ ズナニエツキ Znaniecki (1934) が考案した方法
  - ビューラー＝ニーダーベルガーの定義
    - 「分析的帰納とは出来事を系統的に解釈する方法である。その中には仮説の生成と検証のプロセスが共に含まれる。その重要な特徴は、仮説が当てはまらない例外的なケースの分析である。」
  - 仮説から外れるケースの分析や統合を通して、理論と知見を検証すること（参考：囲み 29.1）
  - 「否定的な事例の分析」(Lincoln and Guba 1985)
- 事例研究における一般化の問い／分析を検証する手段

## ■ 質的研究における一般化

「一般化 generalization」

：研究で得られた概念や関係性が、特定の現場や対象を離れてどれだけ一般的に当て余るかを検証すること。

- ・ 質的研究における一般化は、ある特定の文脈や具体例とつながりのある条件、脈絡、経過などの分析を起点とせざるを得ない⇔一般化を進めるためには、知見（概念とその関連）を、それが埋め込まれていたもとの文脈から切り離す必要性
- 質的研究の強みは、文脈とのつながり；一般化することで文脈とのつながりが手放されてしまう
  - 「唯一可能な一般化は、一般化ができないということ」（Lincoln and Guba 1985）
- ・ 一般化は、ある文脈から別の文脈への知見の「転用可能性 transferability」、さまざまな文脈の比較可能性の程度としての「適合性 fittingness」にもなる。
- ・ 一般化のステップ
  - その研究において、どの程度の一般化が目指されるのか、また達成可能か明確にしておく。（適切な一般化の要求レベルをおさえておく）
  - 研究される現象が埋め込まれたさまざまな事例や文脈を慎重に統合してゆく
- ・ 研究結果の一般化可能性は、サンプリングに依る（理論的サンプリング）

## ■ 継続比較法

- ・ Glaser (1969) 「継続的比較の方法 the constant comparative method」
  - ① 各カテゴリーに当てはまる出来事の比較
  - ② カテゴリーとその特性の統合
  - ③ 理論の限定付け
  - ④ 理論の記述

- 循環的なものであることが重：すでに行われたコード化や分類とたえず比較
- ・ ゲアハルト（1988）の Weber(1949)の理念型（理念的タイプ）形成の考え方に基づいた方法論を考案
  - 個々の事例が再構成され、事例間で比較対照される→複数の事例をまとめるタイプの構成→「純粋な」事例がつきとめられる
  - 似通った事例の最小比較 minimal comparison（幅の中心部分に注目）と、異なった事例の最大比較 maximal comparison（幅の末端に注目）：実証的データに含まれる多様性の幅が明らかになる
- ・ ローゼンタール Rosenthal（1993）ナラティブ・インタビューの比較分析のための個別例の最小・最大対照の方法
- ・ ハウパート（Hauptert 1991）は、「再構成の基準」を設ける方法
- 質的研究における一般化とは、事例研究やその文脈から得た知見を、より一般的で抽象的なパターンへと少しずつ移し変えていくこと。
- 抽象的パターンの有効性：どれほどさまざまな理論的、方法論的立場を組み合わせ用いられたか、そのときにさまざまな研究者が関与したか、そして例外的な事例がどう扱われたかによって確定

## ■ プロセス評価と品質管理

- ・ あるサンプリングのやり方が適切かどうかは、研究設問、目標とされる結果や一般化、使用される研究方法との関連でのみ応えられる：研究プロセスの調和
  - 質的研究を最も効果的に実践するためには、研究の諸段階を全体の研究のプロセスに位置づけて定める必要性
  - 質的方法とその使用の評価は、単なる適用の評価→プロセス思考の評価へと変換する必要性
- ・ 「品質管理」の発想：監査 auditing の概念／手順の監査
- ・ 顧客志向の発想：自らの研究設問に答えるように進められたか（外部顧客への志向）／その研究はたとえばインタビューーとしてかかわった人々の視点に十分自由な余地を与えるものであったか（内部顧客への志向）に関連
- ・ 同僚志向の発想：方法の適用だけでなく、研究を行う姿勢も研究の質を本質的に決める
  - 参考：囲み 29.2（p501）